

小さな島に  
あふれる自然と  
そこに暮らす人々

**黒** 島は自然豊かな島である。引潮の時にだけ見られるという光景があると聞き、串ノ浜へ。海岸にはまるで巨大なワニが昼寝でもしているかのよう大きな岩が連なっている。これは、岩盤の裂け目に地下のマグマがせり上がって冷え固まり、海岸の波で柔らかな岩盤が除かれた結果、固い溶岩だけが突出したもの。玄武岩岩脈というらしい。総延長は三百メートル以上もあり、長崎県最大。驚くべき自然の造形美だ。

家々を守る防風林として活躍しているアコウ。温暖な黒島にはアコウがたくさん自生しているが、中でも根谷の巨木には圧倒される。樹齢およそ百年というこのアコウは、木根と呼ばれる細い根が風に揺れ、おぼけのよう。怖がっていると、ガイドの大村さんが「もうすぐ芽が出て、葉が生い茂ります。濃い緑の葉が茂ると、森のようになるんですよ」と笑った。牡蠣瀬鼻の断崖では迫力の絶景が楽しめる。右を見れば、外海の潜伏キリシタンたちがたどり着いたという長崎鼻。遠く海に向こうには大島や崎戸が望め、恐々と下を覗き込めば、海底が見えるほど透明度の高いエメラルドグリーンが広がっている。

黒島の自然はダイナミックだ。恵み多き島とはいえ、自然は時に猛威を振るう。その中で、潜伏キリシタンたちは一から土地を切り開き、家を立て、作物を育て、子を生み育ててきた。それは並大抵の苦労ではなかったはずだ。山内さんは、島には一人暮らしのお年寄りがたくさんいると話した後、こう続けた。「黒島には、お年寄り一人に対して四人の見回り隊がいます。四人が毎日交代でお年寄りを訪ね、様子を見守るんです。島では年間に約二十名の方がお亡くなりになります。が、生まれるのは一人か二人。だから子どもが生まれると、島をあげて喜ぶんですよ」。この島の人々が過酷な環境の中で生きてこられたのは、いつの時代も一人ではなかったからなのだろう。一人暮らしのお年寄りたちは、決してこの土地を離れたがらないという。

# 自然の造形美